

---

# D.C. ~ダ・カーポ~ オリジナル・ストーリー

朝倉

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

D・C ； ダ・カーポ ； オリジナル・ストーリー

### 【Nコード】

N2581L

### 【作者名】

朝倉

### 【あらすじ】

一年中桜が咲き誇る不思議な島、初音島。

この島を舞台にもうひとつの物語が幕をあける。

## D・C りーダ・カーポ (前書き)

この小説にはオリジナルキャラクターが出てきます。

それでもいい!という方のみご覧ください。

D・C ぐダ・カーポ

ジリリリリリ！

けたたましい騒音がオレを現実へと無理矢理引き戻す。

梗治「う……………ん。」

ごそごそ。騒音を消そうと腕を伸ばすもその腕は虚しくも空をきるだけである。

梗治「む…んああああ！！やかましいわ…！！」

ガン！！ とても目覚まし時計を止めた音とは思えないほど大きな音になった。

梗治「ふっ、人間様に楯突くからこうなるんだ。」

機械相手に何を言っているのか。時間通りにアラームを鳴らした目覚まし時計は何もまちがってはいない。

梗治「ふああ、っふう。起きるか。」

そう言っって少年 橘 梗治 は学校に行く準備をはじめめる。

## 一話

一年中桜が咲き誇る不思議な島、初音島。

この島を舞台にもうひとつの物語がはじまる。ガラガラ。

梗治「うゝす。」

教室のドアを開けて覇気のない挨拶を交わす。

工藤「おはよう。相変わらずダルそうだな。」

爽やかな挨拶をしてきた奴は 工藤 叶 一見女の子に見えるがそう間違わないのは彼が男子の制服を着ているからか。

まあ、とにかくコイツは俗に言う美少年、イケメンに部類される奴だ。

梗治「今日はちょっと眠くてな。」

オレは工藤に言い訳じみた事を言う。まあ、実際あんま寝てないんだよ。

?「今日も、の間違いではないのか?」

梗治/工藤「うわっ!!」

背後からいきなり話し掛けられ二人で驚いた声をあげてしまった。

梗治「杉並、オマエは普通に登場出来ないのか!？」

この神出鬼没な男の名前は 杉並 名字と性別しわからんミステリアスな男だ。

杉並「フツ、それでは面白くないだろう。」

黙ってればこいつもイケメンなのに性格がこれじゃあな。変人過ぎる…。

杉並「同土橋よ、何か言いたそうだな。」

梗治「……………なんでもねえよ。」

コイツは人が考えていることがわかるのか?やはり超能力者か?いや、魔法使いという線もある 杉並「オレは超能力者でも、魔法使いでもないぞ。ニヤニヤ」

梗治「……………もう何も言うまい。」

そのニヤついた顔をぶん殴ってやりたかった。

### 三話

ガラガラ

? 「ま、間に合った。」

? 「兄さんがなかなか起きてこないからですよ。」

三人で話をしていると誰かが教室に駆け込んで来た。

梗治「おっ、今日は間に合ったのか。」

工藤「まあ、ギリギリだけだな。」

? 「誰かさんに朝っぱらから腹に辞書を落とされれば嫌でも起きるさ。」

? 2 「兄さん、いったい誰の事を行ってるんですか?」

梗治「いや、オマエだろ。」

この兄さんと呼ばれた男の名前は 朝倉 純一。音夢と呼ばれた女の子は純一の妹だ。

音夢「梗治くん。」

おっと、ついツッコミをいれてしまった。

梗治「そ、そろそろチャイムがなるぜ。席につかないと。」

バレバレな話題転換だか実際チャイムがなるまで一分とないのは事実なため、音夢は不服そうな顔をしながらも自分の席へと向かった。

梗治「ふう。」

純「危なかったな。」

梗治「まったくだ。」

音夢は怒ると怖いんだよなあ。前に怒らした時はヤバかった。

杉並「フッ。」

何故笑ったのかわからんがムカついたから殴りかかった。

………避けられたが。



## 四話

まあ、なんだかんだでもう放課後。 (手抜きとか言わないで) <

— > ) )

オレは今 桜並木を歩いている。

梗治「(帰ってもやることないし、あそこに行くか。)」

そう言って向かう先は昔純一達と秘密基地と呼び親しんだ大きな桜の元。

たまに無性に見たくなるんだよ。あの桜が。

)) ) ) ) )

梗治「(ん？歌声か？)」

着いたはいいがどうやら先客がいたようだ。

梗治「(それにしても綺麗な歌声だな。)」

？「誰かいるんですか？」

人の気配に気付いたのか歌声の主が声を投げ掛けた。

梗治「スマンな。悪気はなかったんだ。(しまった。あまりに綺麗

な歌声だったから聞き入ってしまった。それに、歌っている本人もきれいだな。」

？「そ、そんな。綺麗だなんて。／＼／」

その少女は顔を赤らめて言う。

梗治「あれ？オレ声に出してたか？」

？「は、はい。それはもうはつきりと。」

梗治「うわっ、恥ずかしっ！」

今のオレの顔は間違いなく赤くなっているだろう。

恥ずかしさでいてもたってもいられなくなったオレは

梗治「わ、悪い。邪魔したな。じゃ。」

逃げ出した。

あまりにもカツコ悪すぎるだろ、オレ。

## 五話

ことりSIDE

私 白河 ことり はあの大きな桜の下で大好きな歌を歌おうと思っ  
つて、学校が終わってからすぐに向かいました。

そしてしばらく歌っていると

？「（それにしても綺麗な歌声だな。）」

誰かの声が聞こえてきました。ですが、声と言っても普通の人には  
聞こえません。

この声は心の声だから………

私は心の声が聞こえる。何故ならこの桜に願ったから。

ことり「誰かいるんですか？」

私がそう呼びかけると桜の樹の影から男の子が出てきました。

梗治「スマンな。悪気はなかったんだ。（しまった。あまりに綺麗な  
歌声だったから聞き入ってしまった。それに、歌っている本人も  
綺麗なな。）」

私は自分の顔が暑くなっていくのがわかった。だって、綺麗って言  
われたし、それに言ったその人がとてもかっこよかったから。

ことり「そ、そんな。綺麗だなんて。／＼／」

梗治「あれ？オレ声に出してたか？」

ことり「は、はい。それはもうはっきりと。」

私は誤魔化すためのつい嘘をついてしまいました。

梗治「うわっ！恥ずかしっ！」

その男の子の顔はどんどん赤くなっていきます。

そして

梗治「わ、悪い。邪魔したな。じゃ。」

走って帰ってしまいました。

彼に悪いことをしちゃったなあと思いつつ、

ことり「（あの制服　同じ学校のだった。もしかしたら学校で会えるかも。）」

彼にまたあえることを嬉しく感じていました。

この気持ちがあるのかこの時の私にはまだわかりませんでした。



## 六話

ガラガラ

梗治「うゝす。」

オレはいつも通り覇気のない挨拶をして教室に入った。

教室には、

工藤「おはよう。」

工藤がいて、

杉並「フッ」

杉並がいて、

純一「よう。」

………純一がいた。

梗治「なっ、もうすでに純一がいるだと!?!しまった!今日傘持ってきてねえよ。」

純一「おい。」

工藤「オレ二本あるから貸してやるっか？」

杉並「いや、今日は槍が降るだろう。普通の傘では防ぎきれんぞ。」

純一「おいー！」

梗治「ヤバイな、串刺しじゃないか。」

杉並「では、オレの鉄製の傘を貸してやるっ。」

音夢「何やってるんですか。今日は槍どころか雨すら降りませんよ。」

と、ここで音夢がやっとツッコミを入れてきた。

純一「オレだってたまには早く来るさ。早く来るのがそんなに珍しいか？」

梗治／杉並／工藤「ああ／うん。」

純一「……………かったりい。」

## 七話

梗治「……………」

ことり「……………」

男子達「ジーーーーー」

くっ、なんだこの状況は！男子達の視線ならぬ死線がオレに突き刺さってくる。

何故こうなったかというところの発端は昼休み……………」

### 昼休み

純「ふあああつ、やっと昼休みか。」

梗治「オマエはずっと寝てただろ。」

純「いや、あれは睡眠学習といってだな。」

梗治「アホか。」

などと話をしていると、

ガラガラ

キョロキョロ





べる予定もないので

梗治「ああ、いいよ。」

と、返事をした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2581/>

---

D.C.～ダ・カーポ～ オリジナル・ストーリー

2010年10月15日20時48分発行